

古代中国にUFOは飛来していたか？（其四）

—— 古典文献の基本的な使い方からの考察 ——

明 木 茂 夫

（承前）

六、異星人のもたらした中国超古代科学文明？—— 丁振宗著『破解《山海経》』

はじめに

誰の作品だったか失念したが中国の随筆に、子供の頃に『山海経』の怪物たちの絵本を買ってもらい怖くて夜寝られなかった、と書いてあるのを読んだことがある。それほどに『山海経』は中国人にとって親しみのある、通俗的魅力にあふれた古典だと言えよう。今回は『山海経』をめぐる中国のトンデモ本について考察してみたい。直接にUFO（未確認飛行物体）を扱った書物ではないが、現代中国でしばしば見かける異星人説に関連するものとして本稿の考察対象に含めて考えたいと思う。またここで「トンデモ本」という俗語を敢えて使用することをお許し願いたい。

「トンデモ本」という言葉は「と学会」^①の藤倉珊氏^②の造語である。その定義については『トンデモ本の世界』^③の「はじめに——とはトンデモのと」で「と学会」会長の山本弘氏が

藤倉氏の定義によれば、「著者が意図したものと異なる視点から読んで楽しめるもの」である。要するに、著者の大ボケや、無知、カン違い、妄想などにより、常識とはかけ離れたおかしな内容になってしまった本のことなのだ。したがって、最初から読者を笑わせることを意図して書かれた本は、どんなに内容がトンデモなくても「トンデモ本」とは呼ばれない。

と述べておられる。また同じ山本氏は『トンデモ本1999 このベストセラーがトンデモない!!』^④の「まえがき」で簡潔に、

著者自身は大真面目のだが、とてつもないギャグとしか思えない本——それがトンデモ本なのである。

とも述べておられる。既に『現代用語の基礎知識』に項目として掲載されているし、また裁判の判例集にこの言葉がそのまま使われたこともある。『判例タイムズ』誌の「水戸地裁龍ヶ崎支部平一〇（ワ）一五五号」の解説に

一、本件判決は、Yが執筆し、Zが発行および販売した書籍がXの著作権、著作者人格権、人格権等を侵害するなどして、XがYおよびZに対し、右書籍の発売等の禁止、廃棄、謝罪広告及び損害賠償を求めたのに対し、これを棄却した事例判例である。……（中略）……

二、Xは、「とんでも本」といわれるような漫画本など多数の著作物を執筆し、右著作物について著作権を有する者であるが、……（以下略）とある。堅苦しい文章の続く判例とその解説文の中に「トンデモ本」という言葉が飛び込んでくるのはいかにもほほえましい感じがするが、しかしくどくどと説明するよりもこの一言で事件の全容までよく分かるような気がする。これを以てしても「トンデモ本」という言葉は既に世間に普及した概念だと言ってよいだろう。

但し忘れてはならないのは、こうした「と学会」の人々は「トンデモ本」を憎悪して罵倒を浴びせているのではない、ということである。むしろこうした変な本が大好きで、著者の意図しなかった角度からだといえ、こうした本を楽しんでいるのである。読書には名作に感動する読み方もあれば、その一方で変な本にツッコミを入れながら知的に楽しむ、という読み方だっているのである。

さてここで長々と「トンデモ本」の定義を紹介したのは、他ならぬこれからご紹介する『山海経』研究書がこの「トンデモ本」としか言いようのない書物だからである。著者自身の思い入れが強すぎて読者から見ると荒唐無稽なものになってしまっている、という点のみならず、読んでいて著者の意図とは異なる角度から楽しめる・笑えるという点から言ってみると「トンデモ本」の典型だとさえ言えるかもしれない。そして我々はこの「トンデモ本」という枠組みがあるからこそ、冷静かつ客観的にこの奇妙な書物の存在を把握し、理解し、かつ楽しむことができるのであって、さもなければ目が点になるか、持て余すか、或いは腹を立てるのが関の山であろう。

そしてこの『山海経』研究書は、専門家が読んで初めてそのトンデモなさが分かるという難物ではなく、誰が見ても明らかに荒唐無稽、爆笑間違いなしという代物である。下手な漫画よりよほど笑える。但しこの本にはまだ邦訳はない。これがなまじ古典に基づいたものであるためにきちんと訳すには労のみ多く、一方訳したところで研究者として益は少ないわけで、こうした本の全訳は今後も望めそうにない。しかし学問的に意味がないと言っても、そのまま読み捨てるには実に惜しい。世に横行する疑似科学の実例としてその内容を分析するのも社会的に無意味なことではなからうし、またそこからこうした思考や理論の成り立ちについて少しでも考察できればと、ここで少し詳しくご紹介することにした次第である。

一、丁振宗氏の『破解《山海経》』

では、ここで取り上げる書物について概観しておこう。

(初刊) 丁振宗著 古籍新解①『古中国的X档案』——以現代科技知識解山海経之謎』知書房出版社、台北、一九九七年七月
これは昭明出版の昭明文史シリーズから一九九九年に同名で再刊されているらしいが、知書房と昭明は同系列の出版社のようで、内容は変わらないものと思われる。ちなみに「X档案」とはいわゆる「Xファイル」の訳語、サブタイトルは「現代科学技術の知識で山海経の謎を解く」とでも訳せよう。さらにこの本は中国大陸でも再刊されている。

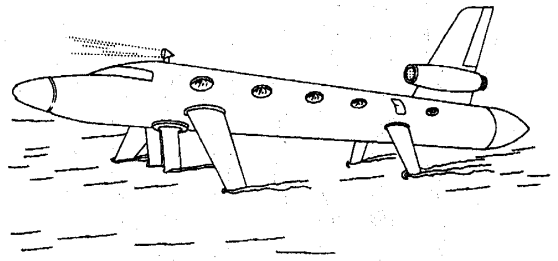
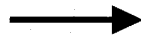
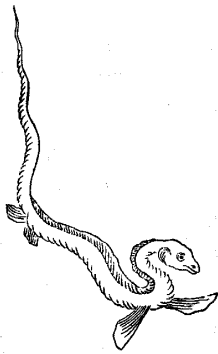
(再刊) 丁振宗著 『破解《山海経》 古中国的X档案』中州古籍出版社、鄭州、二〇〇一年七月

台湾の初刊分と大陸の再刊分は基本的には同じ内容だが、前者は正字体であるのに対して後者は簡体字を用いている点、後者には「編者的話」(編者のことば)という編集者の序文が加えられている点^⑧、巻末に付録として『山海経』の全文が掲載されている点、図の番号が再刊分では若干整理され図の配置も初刊分より見やすくなっている点^⑨、各章についている漢字の「読音表」の台湾式発音記号(注音字母)が後者では省略されている点などが異なる。見た限り本文及び挿絵には異同は無いようである。以下、特に初刊分と再刊分を区別せず、書名を『破解山海経』と略称することに^⑩する。

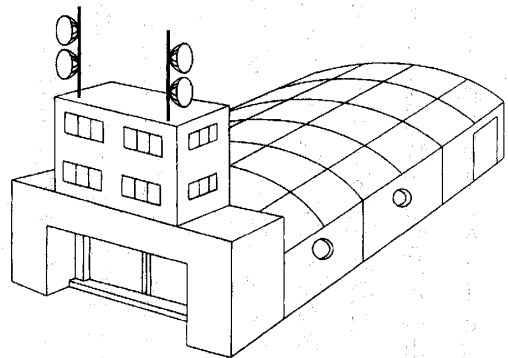
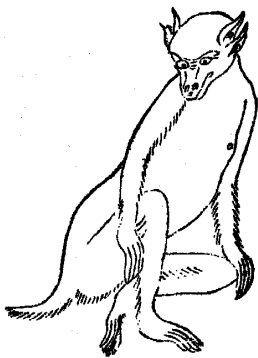
著者の丁振宗氏(以下丁氏とする)は福建省に祖籍を置くマレーシアの華僑で、低温物理学を専門とする科学者。低温技術や冷凍技術、風力エネルギー、超軽量飛行機などの研究に従事する一方、『山海経』やバラモン教の研究も行っておられるようだ。他に『重排新解《道德経》』の著書もある。『道德経』つまり『老子』の研究書なのに相対性理論の話やE=MC²の公式が出てきたりして、これがまた非常に面白い本なのである。また別の機会にご紹介することとしよう。

さてこの『破解山海経』、まず目に飛び込んでくるのは、我々の見慣れた『山海経』の異形の生き物たちの絵ではなく、飛行機やロケットや船や潜水艦など、様々な文明機器の挿絵である! 図1にいくつか例を挙げておいた。左側が現行の『山海経』の注釈書で我々がよく目にする(清)呉任臣の『増補絵像 山海経広注』(以下『広注』と略称)の図像であり、右側がそれに対応する『破解山海経』の図像である。もちろん今日に伝わる『山海経』の古典的図絵にしてもすべて後の時代の絵師が『山海経』の本文記述に基づいて想像で描いたものである。どのように想像なさろうとそれは著者のご自由だが、それにしても飛行機やロケットとは実に想像たくましい。いったいこれはどういうことを主張する本なのであろうか?

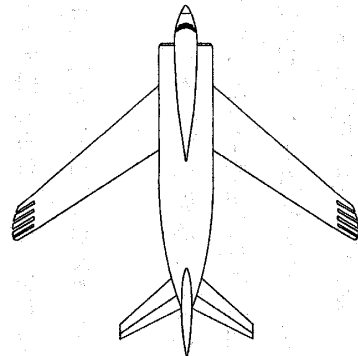
1、「儻螭」



2、「長右」



3、「鵄」



4、「鵄鵄」

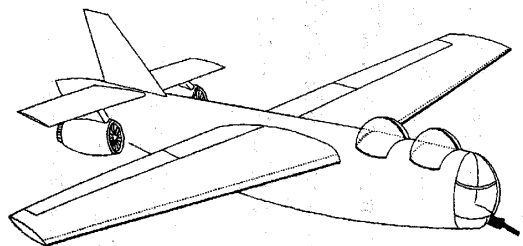
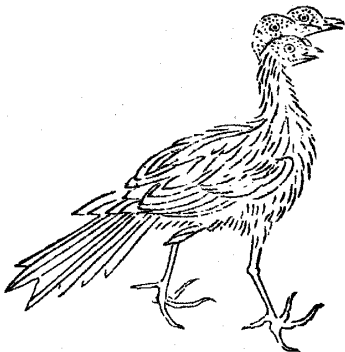


図1 『山海経』の怪物たちも、著者の手にかかると……

要するにこれは、『山海経』が記録しているのは単なる伝説ではなく、中国の超古代科学文明の記録なのだ、と主張する本なのである。言い換えれば、ここに記録されているのは荒唐無稽な想像上の異形の生き物ではなく、飛行機やロケットが飛び回っていた古代の科学文明の姿なのだ、と言うわけである。丁氏は序文で次のように述べる。

あなたは『山海経』を読んだことが、或いはあるいは耳にしたことがあるだろうか？ あなたの印象は、荒唐無稽で一読にも値しないものだったのではないだろうか？ それではあなたは『山海経』を手にした時どう思っただろうか？ 別の角度から『山海経』を見ればその荒唐だと見なされてきた物事に合理的な解釈を与えられるのでは、と期待しなかっただろうか？ そうなのだ。それこそ本書の出发点なのだ。私の考えでは『山海経』に記載された「怪物」はかつて実在していたのであり、「怪事」は実際に起こっていたのである。しかし誤解されないように。私は決して神話や伝説をあなたに信じさせようというのではないのであり、現代科学技術の知識を以て、論理的推理を用いて、『山海経』の記録に合理的解釈を与えようとしているのである。……（序言一「読者へ」）

科学と論理で『山海経』の内容を実証する、と言うのだから期待は高まる。続いて丁氏は言う。

『山海経』が本当に伝えようとしている情報を明らかにするための私の提議はこれである。

『山海経』に出てくる多くの名詞や動詞は文字面の意味のみに基づいて解釈してはならない。それらには別の意味があるのだ。我々は文字の裏に表されている事物を探し出さなければならぬ。そうしてこそこれらの記録の本当の意味が分かるのである。

私はこの観点に立って『山海経』を研究するものである。本書の多くの章節は、こうした特別な字や単語の意味する事物をいかにして推論するかに当てられている。つまり『山海経』全体を一冊の「なぞなぞ集」に見立て、その示すところに分析を加え、さらに現代の科学知識を参考に比較と推測を行い、この「なぞ」を解く、と言ってもよいだろう。このようにして得た結論は当然伝統的な解釈とは異なっている。……（序言三「新しい観点から『山海経』を見る」）

そしてその観点から導き出される『山海経』解釈の原則とは？ 丁氏はさらに続けて述べる。

『山海経』中には人・蛇・鳥・獸・魚・草・木・日・月・神と称せられるものがたくさんある。これらの名称は機械を表現するために用いられている。つまりそれぞれの形状・動作とその活動場所により名称が与えられているのである。例えば、人のように直立し、或いは形状が人に似ている機械は簡単に「人」と称される。細長く、蛇のように動くものは簡単に「蛇」と称される。空を飛べるものは「鳥」と称される。水中で動くものは「魚」と称される、などである。それらはみな機械であっていろいろな形状があり得るのだから、普通の正常な鳥や魚や獸

と形状が似ているとは限らない。もしもあなたがこうした解釈を受け入れられれば、今まで荒唐無稽だと見なされてきた怪物や怪事はもう怪ではなくなるだろう。……(序言三「新しい観点から『山海経』を見る」一、「名称の背後にある意味」)

さらにもう一つ、丁氏は大胆な仮説を提示する。

(山海経の中で) 描かれる海、河川、沼沢や山脈は現在の地勢と完全には一致しない。しかし地質学や地殻に関する学説、大陸移動説に照らしつつ、それに論理的な推理を加えると、書中に描かれる地勢はアジアの遠い古代の状況に一致する。その古代とは、今から六七〇〇万年前のことである。言い換えれば『山海経』は六七〇〇万年前のアジアに発生した出来事を記録した書物なのである。

あわてないでほしい。私は本書の中で、私がいかにこうした結論に達したかを詳細に論じたいと思う。ここで問題なのは、現代に似た先進的な設備がそんな太古の昔にあり得たのか、ということである。考古学と人類進化論からすると、六七〇〇万年前の地球にはまだ現代のような人類は生まれていなかった。しかしながら『山海経』には黄帝、堯、舜、顓頊、鯀、禹などの人物が記録されている。これはどう解釈すればよいだろうか？ 私の考えでは、黄帝たちは現代の人類ではなく、地球人でさえなく、彼らは他の天体からやってきた人たちだったのである。これを直接的に証明する手段はない。しかし推理によって間接的に証明することはできる。よって今のところ私はそれをひとつの仮説としておくしかない。本書のすべての解釈と推理は次の仮説の上に成り立っているのである。

太古の時代、少なくとも二度にわたって外の天体からやってきた人々が地球上で活動していた。しかし彼らは地球の気候では呼吸ができなかった。

……(第一章「基本仮説」)

「あわてないでほしい」と言われましてもねえ…… 要するに『山海経』に書かれていることは荒唐無稽な伝説などではなく、超古代科学文明の記録なのだ」ということと「その超古代科学文明を地球に伝えたのは宇宙からやってきた異星人なのだ」ということが、丁氏の主張の大きな二つの柱なのである。では丁氏はいったいどのような理論でそれを証明してくれるのか、期待しながら読み進めてみたい。

二 『山海経』の図絵は文字の形？

まず本書に満載されている飛行機やロケットや船や潜水艦や車輛などの姿は、どのように『山海経』を正しく解釈して導き出されたのかを読み

取ってみよう。最も分かりやすい実例を挙げる。図2の1をご覧ください。『広注』所載の「謹頭国」の図である。『山海経』の「謹頭国」本文は次のとおり。

謹頭国在其南、其为人人面有翼、鸟喙、方捕鱼。一曰在畢方東、或曰謹朱国。(第六「海外南経」)

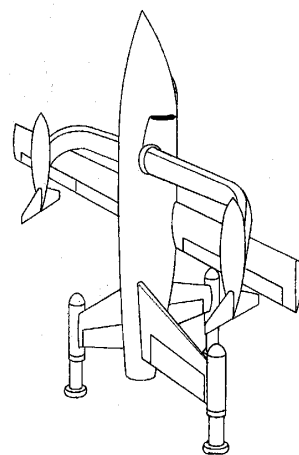
謹頭国は其の南に在り、其の人と為りは人面にして翼有り、鳥の喙、方に魚を捕ふ。一に畢方の東に在りと曰ひ、或いは謹朱国と曰ふ。

『広注』の図は基本的に画家の想像によりつつも、本文の「人面」「有翼」「鳥のくちばし」「魚を捕らえる」という条件を忠実に満たした図像になっていることが分かる。ところが丁氏の解釈にかかると図2の2(原図17-2-1)のように、この「謹頭国」が垂直離着陸ジェット戦闘機のことだということになってしまふのである！⁽¹⁸⁾ではそれがどのような解釈から導き出されると言うのだろうか。

『広注』の絵とジェット機では全然似てないではないか、とおっしゃるなかれ。先端がくちばしのように尖っている様、手の曲がり具合、足の曲がり具合、背中についた翼、魚と見えて実はタンク状のもの……。古代人が異形の人の様に描いた形状は実はジェット機のこうした特徴だったのだ、と、丁氏の頭の中では整合性があるらしいのだ。しかし『広注』系統の絵ならまあそういうことになろうが、図2の3に示した『蔣本』の「海外南経」



1、『広注』「海外南経・謹頭国」



2、『破解山海経』 図17-2-1



3、『蔣本』の「謹頭国」人(海外南経)



(大荒南経)

図2 著者の解釈による「謹頭国」は……

と「大荒南経」の絵ではあまりこの飛行機と整合性はなく、特に「大荒南経」では魚を口にくわえていて姿勢も異なるわけで（むしろカラス天狗か河童だね、こりゃ）、『広注』系統の図絵にたまたま描かれたポーズのみを根拠にするのは危険な気がする。まあ諸本を集めて比較検討までせよ、というのは素人衆にはちと酷かもしれないが……。さて、さらに続けて丁氏は言う。

この記録に言う「其の人と為り、人面にして翼有り」からすれば、この飛行機には操縦者が載っていることに疑問の余地はない（なぜに？：明木注）。しかし「翼がある」というのは、既に述べた人型の飛行機の翼が人の手に相当するのとは異なる。「魚を捕らえる」とあるからには手で魚を捕らえているはずで、「謹頭国」の人は手とは別に翼を持っているのである。この点から推測するに、二つのフロートは主翼先端に直接ついているのではなく、左右一対の支柱によってフロートが機体に取り付けられていて、それが手に相当すると考えられる。

本文には「その南にあり」とある。「その」とは『海内南経』の言及する地域、即ち雲南、広西、広東、湖南と江西の半分を含む地域である。よって「その南」は当時の南海である。つまり「謹頭国」は海上にあったことが分かるのであり、「謹頭人」は人型の水上機で「謹頭国」はこれらの水上機の集まる水域だったことも証明できる。

あ、この絵のタンクか爆弾に見える部分は、水上機の着水用フロートだったんですか。なるほどなるほど……。でもこの形状だと着水したら尾翼部は水に浸かってしまうと思うのだが……。さらに丁氏はこの飛行機についてこう述べる。

しかし本文には「一に畢方の東に在りと曰ひ、或いは謹朱国と曰ふ」とあり、またこの直前で「畢方鳥」にも言及している。第十四章で我々は「畢方鳥」が一種の戦闘機であると考えた。「畢方鳥」は『山海経』本文中では「西次二経」と「海外南経」に見え、この二つは異なる場所の事柄である。よって青海―チベット高原の西北と雲南の中部にそれぞれ「畢方鳥」戦闘機が駐機していたと考えられる。しかしこの二つの場所は内陸にあって海上にはない。ゆえに「謹朱国」は内陸にあったことになる。そして同様の飛行機が記されている以上、この飛行機は「謹頭国」と「謹朱国」の間を飛行していたと信じることができる。これはつまり、この飛行機は水面に着水することもできたし、陸地に着陸することもできた、ということなのである。陸上に着陸する場合は尾翼で着地していた。その時の状態が、背中に翼があって、両手に魚をにぎった人の形に見えたのである。

図17-2-1（本稿図2の2：明木注）がこの推測に基づいて描いた「謹頭国」機が垂直離陸する様子である。もしもその方向を変えて飛行機の背部左側から見れば、右のフロートと水平尾翼は機体に隠れてしまい、図17-2-2（本稿図3の1：明木注）のようになる。この形状こそ「朱」の字に似ているのである。「謹朱国」の名はここから来た可能性が高い。よって「謹朱国」は陸上の飛行場だったことを示しているのである。

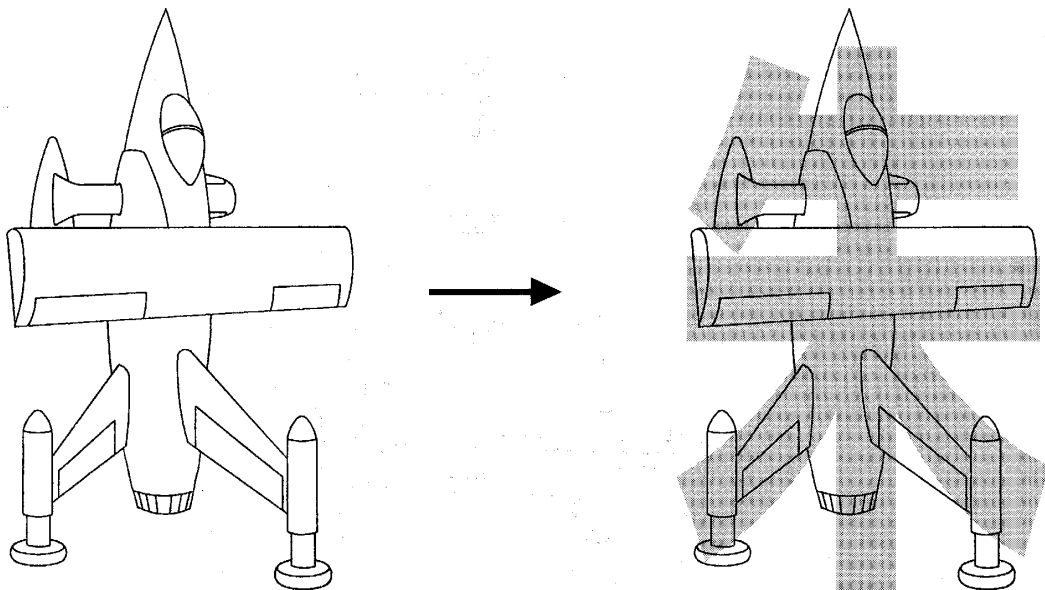
ん？ ごちゃごちゃしてよく分からないと思うので、私が整理してご説明したい。まず丁氏がここで細かく「謹頭国」と「謹朱国」が別の場所に

あったことを論じておられるのはなぜだろうか。おそらく、『山海経』本文にある「しつていはく曰あるいはく」は普通「一説では」と訳すべきところであるが、この飛行機は海上にある「謹頭国」ではフロートで着水し、内陸にある「謹朱国」では垂直に離着陸するんだ、よって「謹頭国」と「謹朱国」とは別名ではなくて、それぞれ海上と内陸にあった別々の国なんだ、ということを書いたがためらしい。さらに「朱」の字に似ている、というのは何事だろうか。

図3の1（原図17-2-2）をご覧いただきたい。これは図2の2を別の角度から見た図だそう。まあ確かに斜め後ろから見ればこう見えるだろう。そしてこの角度から見たこの飛行機の形が、図3の2のように漢字の「朱」の形になっているではないか、だから「謹朱国」と言うのだ、と丁氏は主張するのである！ そんなの、あり……？

いや、笑い事ではない。この本は全編この調子なのである。やれこの絵はこの字に見える、やれあの絵はあの字に見える、このようにして丁氏は古代中国に科学文明が存在したことを証明して行くのである。それにしても「朱」の字は現在の楷書体でこそこういう字体だが、古代の金文では「木」、篆書では「木」という形をしていてこの飛行機の形にはなっていない。その点矛盾はないのか、とても心配になってしまう。

「謹頭国」以外の実例もいくつか挙げておいた。図4（原図7-2-4）、これは比較的分かり易い。この飛行機の平面形が「巫」という字になっていると言うのである。図5（原図11-2、11-2-1）は「糸」という字がクレーンの形だと言うのだが、これはかなり無理がありそうだ。図6（原図4-3-11、4-3-12、4-3-13）はもっとすごい。この表面効果翼艇（19）は側面図が「肥」という字に見えると言うのだが、ご覧のように九十度寝かせて、さらに長く引っ張らないとそうは見えないわけで、かなり苦しい。図7（原図17-4-1）も「載」という字を九十度寝



1、『破解山海経』 図17-2-2

2、「朱」の字の形が！

図3 なぜ「謹朱国」なのか、と言うと……

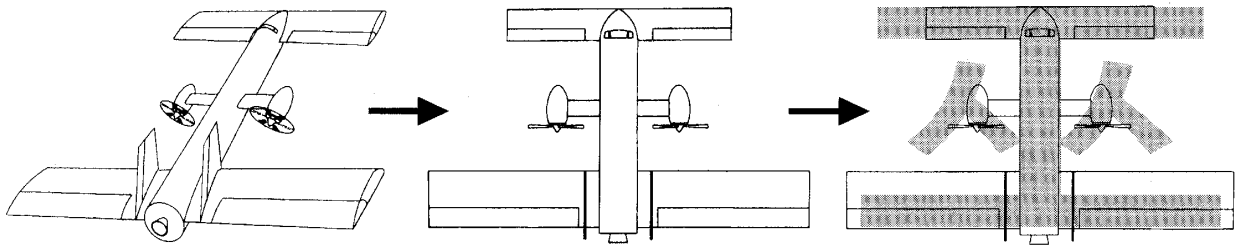


图4 「巫」

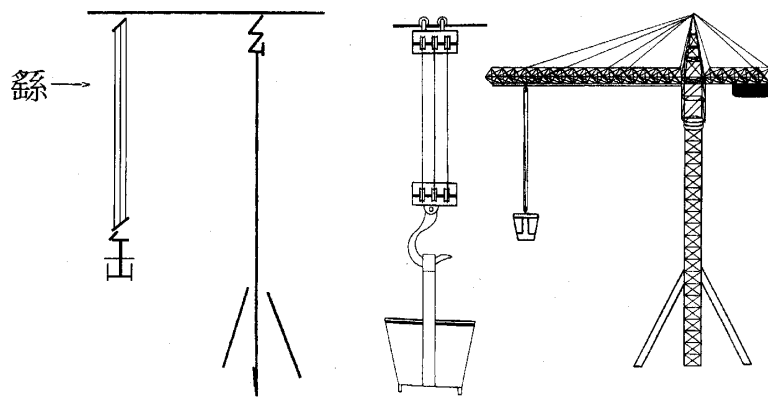


图5 「繇」

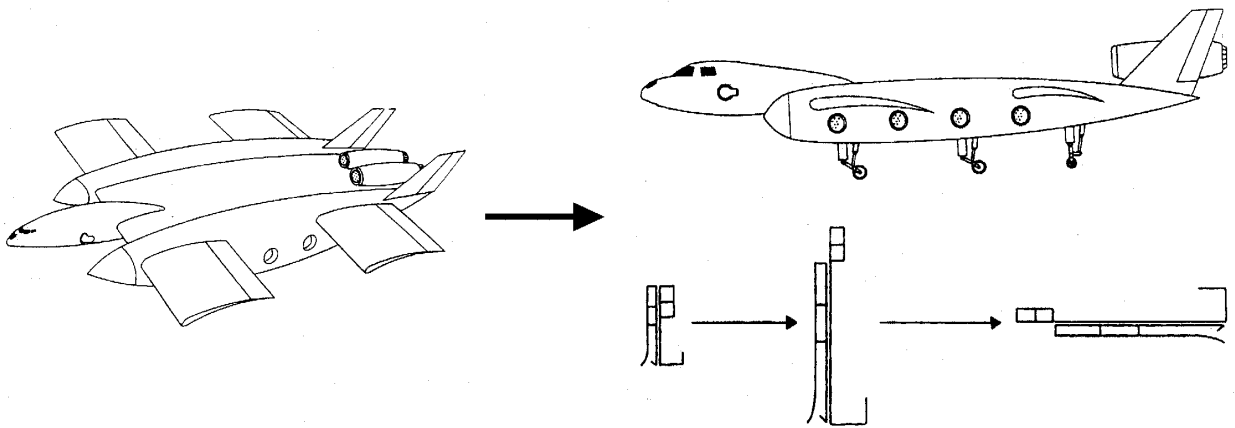


图6 「肥遺」

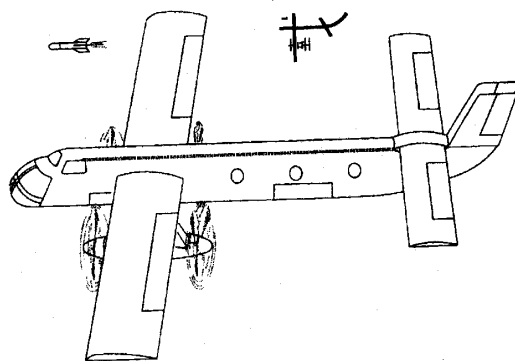


图7 「載」

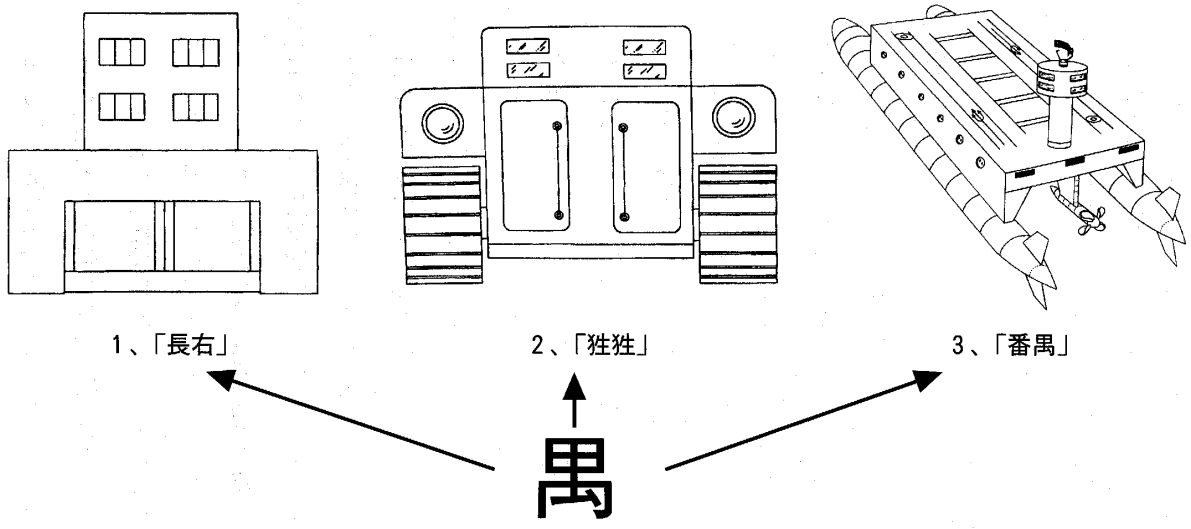


図8 「禹」の字の使い回し?

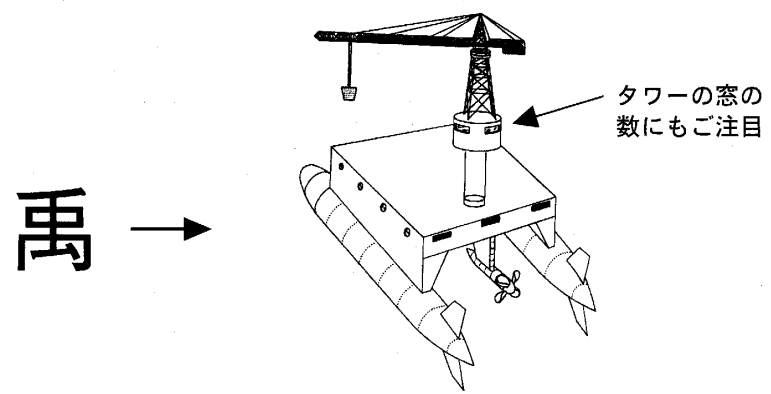


図9 「禹」

かせる。この飛行機になると言う。「戈」の部分か胴体と主翼、尾翼になっている。残りの「土」と「至」はエンジンとプロペラで、この角度から見た絵では右翼のエンジンは胴体に隠れて見えない。さらに「戈」の右上の「点」は発射されたミサイルだと言うのである！ いやはや、芸が細かいこと……。ただ図8をご覧いただくとお分かりのように丁氏は「禹」の字を建物(原図11-4B)とキャタピラ式車輪(原図12-1-4)と双胴船(原図21-3-1)と三個所に使っている。このように同じ字を気ままに別の物に用いてよいものやら、他人事ながら気になるところである。さらに図9(原図24-4-1)はというと図8の3の双胴船と同型式のサブタイプで、これは「禹」の字の形になっているのだそうだ。つまり「禹」の字の上の「ノ」がクレーンになっているのである。よく見てもらいたい。「禹」の絵と「禹」の絵で、船体から延びているタワーの上部の窓の数がちゃんと変えてあるのにお気づきだろうか。ちゃんと「田」形と「口」形になっているのである！ これも実に芸が細かい。

三、黄帝の核兵器?

また著者の思い入れたっぷりの強引な議論にも、目を見張るものがある。例えば第十五章「黄帝的『超級

鼓』では「夔」という怪物についてもすこいことを述べる。まず問題の『山海経』本文から。

東海中有流波山、入海七千里。其上有獸、状如牛、蒼身而無角、一足、出入水則必風雨。其光如日月、其声如雷。其名曰夔。黄帝得之、以其皮為鼓、橛以雷獸之骨。声聞五百里、以威天下。(第十四「大荒東経」)

東海中に流波山有り、海に入ること七千里。其の上に獸有り、状は牛の如く、蒼身にして角無く、一足、水に出入すれば則ち必ず風雨あり。其の光は日月の如く、其の声は雷の如し。其の名を夔と曰ふ。黄帝之を得て、其の皮を以て鼓と為し、橛は雷獸の骨を以てす。声は五百里に聞こえ、以て天下を威す。

これに対して丁氏は次のように述べる。

この一段は何を述べているのか分かるだろうか？ 実はこの一段は黄帝が行った水爆実験の過程を詳細に記したものだ。信じないか？ ではまず水素爆弾の原理と爆発のプロセスからご説明しよう。

こともあろうに水爆実験とは…… これに続けて丁氏は核兵器の原理と構造について長々と解説するのだが、そこは省略してその先を読んでみよう。

水爆が爆発する時には重水素(D)と三重水素(T)が核融合してエネルギーを発生する。……(中略)……そうするとこの『山海経』の記録にある「水」は我々の普通に飲む水ではなく「重水」である可能性が高い。もしも実験用水素爆弾であればその重水は事前に弾体内に注入しておくのではなく、起爆直前に注入するはずである。よって本文の「出」は「容器から出す」ことであり、「入」は「重水を夔の内部に入れる」ことを示す。……(中略)……「橛」は字典では名詞で「棒くい」のことだが、ここでは動詞であり、多くの本では「打つ」だと解釈している。それは間違いないが、炸薬を起爆させるための撃針も円柱形で「棒くい」に似ており、これを「橛」だと言うことができる。……

(中略)……私は、この「風雨」の「風」はエネルギーを表し「雨」は放射を表す、そしてそれらを合わせた「風雨」が「核反応」を表すと考える。この解釈に立てば、「則ち必ず風雨あり」は「こうすれば必ず核反応を生ずる」ということなのである。

「風雨」だけでそこまで言うかあつ？ そもそも水爆の重水って起爆直前に注入するものなのだろうか？ それに水爆の爆発する原理って、私のこの訳で間違いないですよ？ 私は理科系に弱いもので、識者のご指導を待ちたい。

いやはや、ここまで強引な議論というのも却って天晴れである。それにしても黄帝が核武装していたとは…… いや、それだけではない。丁氏はその核兵器の運搬手段である車載式中距離弾道弾にも言及する。『山海経』の「南山首経」の原文に次のようにある。

有獸焉、其状如禺而白耳、伏行人走。其名曰狴狴。食之善走。

獸焉に有り、其の状禺の如くして白耳、伏行し人走す。其の名を狴狴と曰ふ。之を食らば善く走る。

この狻狂という動物について、丁氏は第十二章『獸』の検討その二で次のように述べる。

『山海経』の記録ではその体や足の色には触れていないのに、なぜわざわざ耳の色が白いと記したのだろうか。ここには特別な意味があるに違いない。この耳は普通の動物の耳ではないことに注意されたい。現代の科学技術から推測するに、この耳は皿形アンテナで、通信や遠隔操縦に用いるものである。なぜそう言える？ 別の角度から考えなければならぬ。『山海経』の研究書の多くは狻狂の「伏行」と「人走」を、動物のように伏せ歩きする以外に人間のように立って歩行できる、と解釈している。しかし私はこの「伏行」と「人走」は同時に発生する事柄だと考える。狻狂は伏行するのみで、別の物が「人走」するのである。『山海経』では「人」の字は直立している物、或いは人の形の物を表している。ゆえに人の形をした飛行機以外に有翼のミサイルも表していると言える。そしてそのミサイルは狻狂の背中に直立して載っているのである。ミサイルの翼は人の手のように斜めに両側に広がっている。狻狂が動く時はミサイルも一緒に動く。ゆえに一人の人が動いているように見える。言い換えれば狻狂というのは、自走式のミサイル発射台、もっと正確に言うと、ミサイル発射車輻なのである。もしこの推測が正しければ、「白耳」はミサイルを制御するための皿形アンテナだということになる。『山海経』の記録では耳の数には触れていないけれども、獸の耳のように左右一対だったのだろう。つまり皿形アンテナは二つあり、そのうちの一つはミサイルからの電波を受信するもので、その信号をコンピュータで処理してもう一枚のアンテナから送信し、ミサイルの飛行方向を制御したのだろう。

そして丁氏はその車載式ミサイルの形状を図10（原図12-1-3）のように示す。狻狂は古典的図絵では猿のような生物として描かれることが多いのだが…… ちなみに先ほどの図8の2はこの車輻の正面図である。さらに『山海経』の「北山首経」に

有獸焉、其状如禺而文身、善笑、见人则臥。名曰幽鷓、其鳴自呼。

獸焉に有り、其の状は禺の如くして文身、善く笑ひ、人を見れば則ち臥す。名を幽鷓と曰ひ、其の鳴くや自呼。

とあるのをさして丁氏は、「善く笑う」というのはベルトで車輪に回転を伝える時の摩擦音のことだとか、「幽鷓」というのは起重機のブームが動く時の音だなどと言う。そして「人を見れば則ち臥す」についてこう述べる。

この部分は、「それは人を見ると伏せる」という意味ではなく、「それが出てくると、人が伏せる」という意味なのである。「人」とはミサイルのことであった。それな

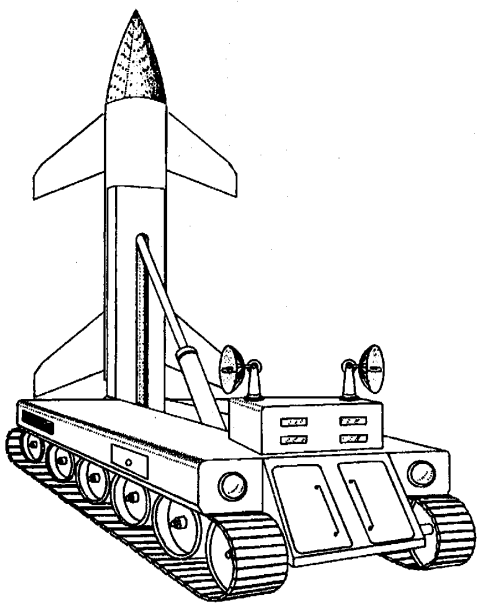


図10 「狻狂」は自走式ミサイルランチャー？

らば「幽鷓」はミサイルを乗せて持ち上げる為の発射台を表している。発射台によってミサイルが縦方向から水平方向に寝せられた時、ちょうど人が横になるように見える。よって「人則ち臥す」と記したのである。

「見人則臥」を「見れると人が臥す」と解釈するのはかなり無理があるように思うが、それにしてもここまで断定的な言い方ができる自信はどこから来るのであろう。そもそも丁氏の言うとおりこれがミサイル発射機だったとしても、『山海経』はなぜミサイルを寝せるところだけ描写して、ミサイルを立てるといふ一番かっこいいところを描写しないのだろうか？寝ていたミサイルを立てて無事発射すれば、その後伏せるのは空の発射台だけ。ミサイルを搭載した状態で発射台を倒すのは、演習の時や発射を取りやめた時や不発の時はずだ。なぜわざわざ寝せるところを描写せにゃならん？などというツッコミは無粋だからやめておこう。

四、舜は宇宙人？

そうして丁氏は彼のもう一つの主張、「宇宙からやってきた異星人が超古代科学文明をもたらした」について、決定的な証拠を挙げる。第二十章「『黄帝』と『舜』とは何者か？」の図11（原図20-3-1）をご覧いただきたい。ここまでおつきあいただいた読者にはもうお分かりであろう。いにしえの聖天子、帝舜は実は宇宙人だったと言っているのである。「舜」という漢字は、宇宙服を着てヘルメットをかぶった帝舜の姿を写したもののなのである！丁氏は次の様に事細かく述べる。

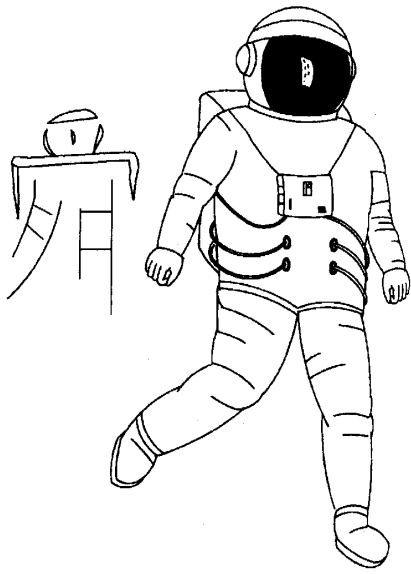


図11 帝舜は宇宙人だった？

では「舜」という字は何だろうか？それは宇宙服なのである。月面に着陸した宇宙飛行士やスペースシャトルから出てきた宇宙飛行士の写真を見てほしい。彼らのかぶっているヘルメットのバイザーに光が反射する時は、外から飛行士の顔が見えずバイザー上に外の光が反射しているのが見えるだけであることに注意してほしい。……（中略）……「舜」の字の上部の「爪」の字のような部分はヘルメットが光を反射しているのを表している。上の棒はヘルメットの上の縁を、そしてその下の三つの点はバイザーに映った光の点もしくはバイザーに映った外の物を表している。真ん中の「一」の両端を下にのばすと、肩と両腕に相当する。左下の「夕」は後ろに曲げた右足と、曲げたことよってできたズボンのシワを表している。右下の「丰」の部分を少し下にのばせば、前に踏み出した左足とズボンのシワになる。このように考えれば、

「舜」の字が宇宙服を着て左足を前に踏み出した人の姿だと信ずることができる。

わははは！ 舜という漢字に合わせて宇宙服姿の舜も片足をびよこんと上げているではないか！ ところで、地球上の人々が見た舜の姿が宇宙服を着ていたのはなぜか、地上では舜は宇宙服を着ている必要はないはずだ、というツッコミは誰でも考えつくところである。しかし丁氏はその疑問にも答えてくれる。

黄帝たち宇宙人は地球の空気が呼吸に適さなかった。よって地上で作業をする時にも常に宇宙服を着ていなければならなかった。そうするとこの宇宙服は密閉され空気がもれないようになっていただけではなく、空気の圧力にも耐えなければならぬ。彼らの必要とする空気圧が一気圧より大きいのか小さいのかは分からない。しかしこれらの宇宙服は厳密に検査されてから使用されたに違いない。宇宙服の気密性の検査には水に深く浸けるの一番だ。

そして丁氏は『山海経』の「大荒南経」に「南旁は名づけて従淵と曰ふ。舜の浴する所なり」とあるのに目をつけて、

私はこの「舜の浴する所なり」とは舜帝がここで沐浴したことを指すのではないと思う。彼らは地球の空気を呼吸できないのにここで水浴びなどできるだろうか？ この言葉は右に述べた宇宙服の試験のことを表しているのである。

舜には地球の空気が呼吸に適さない、という話を丁氏がご自分で設定しておいて、だから宇宙服を脱いで水浴びなどできるだろうか、と尋ねられてもこちらは困るのだが、ここでご注意いただきたいのは右で見たような考証が、少なくともこの本の内部では互いに補い合い、互いに関連して、一貫性をもって古代世界を描き出していることである。但しそれが客観性を持つかどうかということとは別問題だが……

五、『山海経』の図像について

本来『山海経』には図像があったらしい。『山海経』訳注で高馬三良氏は、右で触れた「謹頭国」の「方に魚を捕ふ」(ちょうど魚を捕らえているところである)のような表現について

このような表現は『山海経』が絵の解説であるよい証拠である。

と述べておられる。また陶淵明には「読山海経」という詩があり「山海図を流観すれば……」²⁰とある。陶淵明の時代にも『山海図』があったらしい。現在我々の見ることのできる図像は明代以降のものであり、すべて『山海経』の本文の記述に従って、その他の書物のイメージも盛り込みながら、画家の想像で描かれたものであることは言うまでもない。しかし見ているだけで楽しい『山海経』の図絵だから、そこからさらに想像をたくましくする現代人が現れるのも不思議ではない。いやむしろ、図像の失われた『山海経』にできるだけ当時の姿に忠実な図絵を復元してやりた



図 12 孫曉琴女史の描く「謹頭国」

いという情熱、という点から見れば現代のトンデモ本も明代以降の画家たちの図絵の延長線上にあると言えなくもない。

右に詳しく見てきた丁氏の『破解山海経』以外にも、画家たちが自由に想像力を奮った図像は発表されている。例えば、これは別稿で取り上げるつもりなのだが、最近出た王紅旗(文)、孫曉琴(画)の『経典図読 山海経』という本がある。挿絵を描いておられるのは本文の著者王紅旗氏の夫人で画家の孫曉琴女史である。この本の挿絵の元になった孫曉琴女史の絵画は縦5メートル強・横8メートルという巨大なもので、パノラマ風に描かれた『山海経』の大地に怪物たちがわらわらとうごめく、『山海経』マンダラとでも言うべき作品である。この原画からそれぞれの怪物の絵を独立させて切り出して本書の挿絵とし、さらに描き下ろした挿絵もそれに加えられている。この挿絵がまた思い入れの強い絵で、右で取り上げた謹頭国は図12(原書はカラー刷り)のようになっている。おいおい、『山海経』の研究ってのは解釈者のやりたい放題かあ？

ついでながら、ちょっとした実験をお目にかきたい。拙論「古代中国にUFOは飛来していたか？」は私が本学で行っている国際文化論(平成十六年度からは異文化理解と改称)の講義録を発展させたものであることは既にお話ししたが、授業でこの『山海経』を取り扱った時、これを初めて読む学生諸君に図像を一切見せず、本文のみを訓読し、現代語訳し、そうした上でそこで読み取ったことを自分の思うままに絵に描いてもらったのである。これで『山海経』の怪物たちの古典的図像が似たような形をしているのはその前の図像によって形象ができあがっているからであり、新たに先入観なしに描けば十人十色、いろいろな絵ができあがることを学生諸君に実感してもらおうと思ったからである。授業の余興とはいえ、いや、なかなか楽しかった。

その際取り上げたのが「帝江」である。これを題材にしたのはこの「帝江」の姿^{すがた}形^{かたち}を表す『山海経』の文章が特に奇妙奇天烈だからである。他の怪物が異形ではあるもの、これはほぼ人型、これは犬型、これは亀型、これは魚型、これは蛇型とだいたい類推がついたの

に対して、この「帝江」だけは元がどのような動物を念頭に置いたものなのか皆目分らないという代物なのである。『山海経』の「西次三経」に言う。

有神焉、其状如黄囊、赤如丹火、六足四翼、渾敦無面目。是識歌舞。実為帝江也。

神焉に有り、其の状は黄囊の如く、赤きこと丹火の如く、六足にして四翼、渾敦として

面目無し。是れ歌舞を識る。実は帝江たるなり。

六足で四翼というのも面白いし、黄囊（黄色のふくら）と言いながら赤いというのも解釈が難しい。混沌としていて顔も目も無いというのも、どう解釈するかで絵は全く変わってくるだろう。

古典的には図13（『広注』）のような絵になっている。これを本文に基づいて学生諸君に自由に描いてもらったのが図14である。ここに採用する際に基準としたのは絵のうまいへたではなく、『山海経』の本文の記述の要素を満たしているかどうかということである。例えばいかに絵が上手でも、『山海経』に「無面目」と書いてあるのに顔を描いてしまったら失格、六足とあるのを六手としてしまったら失格、という具合である。どうぞ各作の数々をご覧いただきたい。「六足四翼」とあるから「昆虫」系を想定した人もいる。また「神ここにあり」とあるから「神様」というのを意識した人もいる。「歌舞を識る」を重視して踊っている絵にした人もいる（何人か音符を書き入れている人がいるが、これは歌を表現したもの）。結局『山海経』の図絵というのはこういう性質を持ったものなのである。ついでに丁氏の作品をお目にかけてよう。図15（原図22-2-1）である。つまり「帝江」とは人工衛星のことなのだそうだ。「袋のような胴体」とはこうした円筒形の衛星の本体で、「六足」とは六本のアンテナ、「四翼」は四方に広げた太陽電池、「混沌としている」というのは衛星本体がしわの金属箔で覆われていることだ、とおっしゃるのである。まことにすばらしい解釈である。しかしその発想の独自性、獨創性は認めるとしても、結局は私の学生諸君にやってもらったことと方向性としては同じだと言わざるを得ない。丁氏は情熱をもって文章力を駆使して独自の古代世界観を展開なさってはいるが、客観的な論理性・科学性となると丁氏が学生諸君に飛び抜けて優位に立っている、と言うわけには残念なぐらいかないのである。自然科学を持ち出してきているからと言ってその著述が科学的というわけではな



図13 『山海経広注』の「帝江」

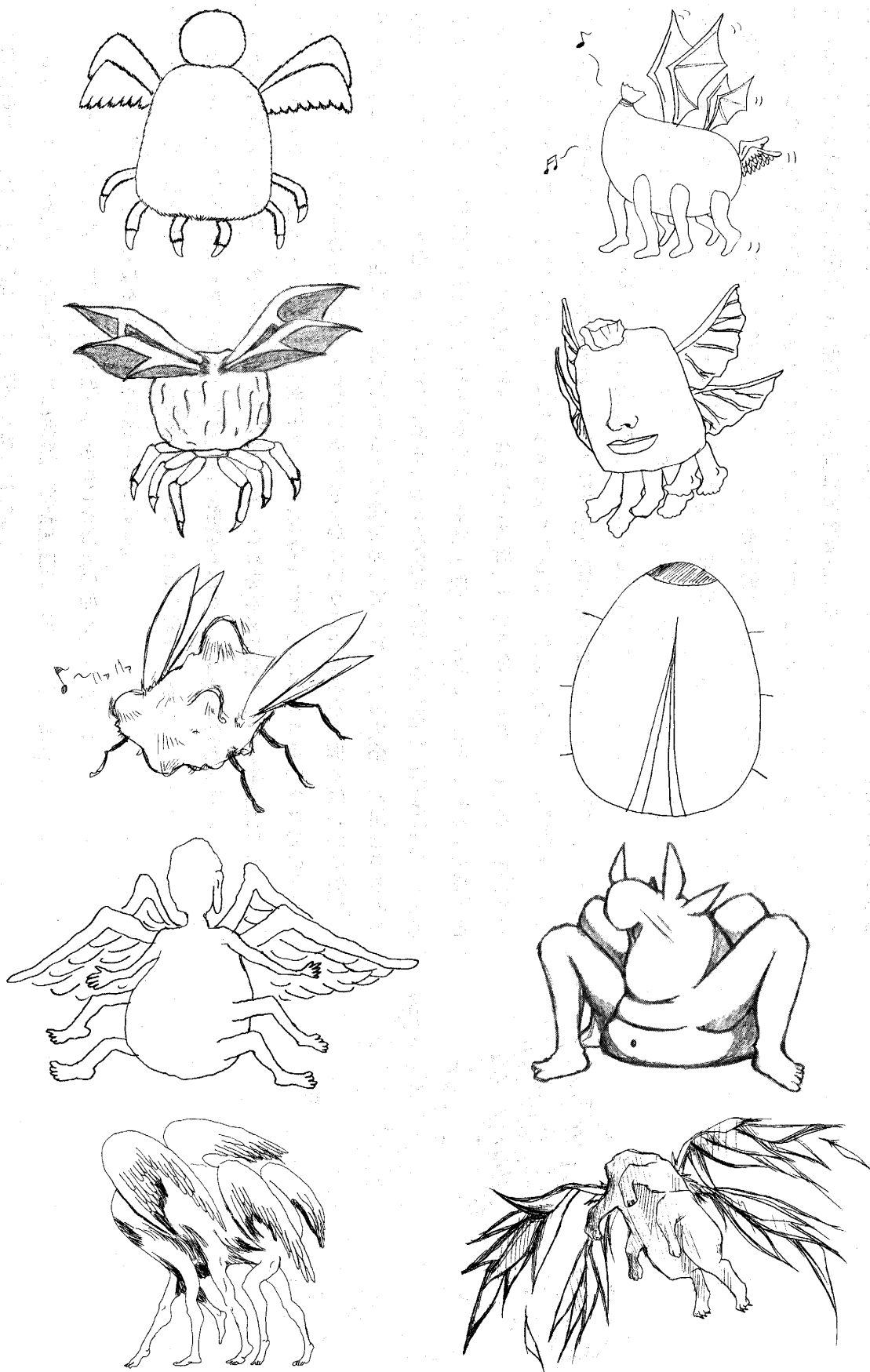


图 14 学生諸君の描く「帝江」たち

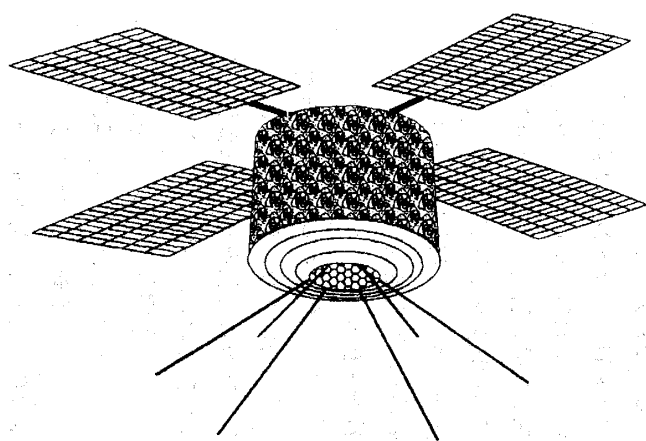


図15 丁氏の描く「帝江」

いのだ。

もちろん丁氏は丁氏なりに『山海経』を実に詳細に隅々まで読み込んでおられることは認めなければならぬ。本書の各章で明らかにされる科学文明の正体は、決してその場限りの思いつきを集めただけの物ではない。既に見たようにそれぞれの章は巧みに他の章と関連づけられ、全体として整合性のとれた古代世界を描き出すことに成功している。例えば核兵器を持ち出せば、それを運用するためのミサイルや発射システムも別の章でちゃんと用意してある。またもう少し学問的な面では、類似した表現や字句をきちんと検索して集め、それを整理した上で一貫した基準で解釈を行っている。内部では自己完結しているのだ。そういう意味で本書はそんなところのトンデモ本とは訳が違うのである。もちろんそれだからと言って、初めに結論ありきという基本的な姿勢を容認できるわけではないが……。

いかがだろう。丁氏の労作を拝読した我々は、その思い入れの強さと同時に議論の強引さも感じ取った。もちろん我々中国学の研究者が日頃用いている基本的方法によれば、丁氏の論法の矛盾や不備を指摘することは可能であろう。しかしこの本、読後にどんな感じが残ったであろうか。こんな強引なことを言われても全く腹は立たない。むしろ非常に楽しく読めるのである。もちろんそれは、歴史から消された幻の古代科学文明の存在を初めて知った喜びなどでは決してない。丁氏が情熱を込めて語れば語るほど、読んでいる我々はその奇想天外な話の展開を、一種のエンターテインメントとして心底楽しむことができるのである。その意味で冒頭に述べたように、著者の意図とは別の角度から楽しめる典型的な「トンデモ本」だと言える。いやむしろ、仕事上好むと好まざるとにかかわらずアカデミズムの側に身を置く者として、腹を立てるでもなく、持て余すでもなく、世の中にはこういう本も堂々と売られているという事実を認識しつつ、楽しみながら客観的にこれに対処できるのも、この「トンデモ本」というカテゴリーがあるおかげなのだと言わなければならない。

それにしても『山海経』の図絵は丁氏や孫氏のような現代の解釈者の手にかかる右で見たようになってしまっただけで、まことに『山海経』の怪物のメタモルフォーゼとでも言うべき状況を呈している。これは私の個人的感想なのだが、最近の『山海経』研究本の一部は、解釈者による言いたい放題・描きたい放題の状態になっている、という感のなきにしもあらずなのである。まあそれは『山海経』という本がそれだけ通俗的な魅力にあふれているということでもあろうか……

『山海経』の図絵にご興味がおありなら、是非前掲馬昌儀氏の『古本山海経図説』や『全像山海経図比較』のような名著を手にとってみたい。過去の『山海経』図絵の板本を網羅的に集め、それを丁寧と比較し、また怪物ごとに整理して集めてくれているので、同じ怪物の図絵が書物によってどう違うかが一目瞭然となる。そうした上でトンデモ本を見れば楽しさ倍増間違いなし。トンデモ本をトンデモ本として楽しむには、その基礎にきちんとした常識と知識が必要だということを忘れてはならないのである。

注

- (1) 明木は本稿其一・其二を書いたことが縁で、二〇〇二年より「と学会」の正会員となった。
- (2) ライター・古書コレクターで「と学会」運営委員。
- (3) と学会編『トンデモ本の世界』洋泉社、一九九五。後に宝島社文庫、一九九九。
- (4) と学会『トンデモ本1999 このベストセラーがトンデモない!!』光文社、一九九九
- (5) 『現代用語の基礎知識』一九九六年版(自由国民社)に次のようにある。
 トンデモ本：大予言、超科学、UFO、超古代史など世の常識に照らして妄想に類することを大まじめに吹聴する本。SF作家らで作っている「と学会」が『トンデモ本の世界』(洋泉社)なる本を出した。
- (6) 判例タイムズ社『判例タイムズ』一〇三二(二〇〇〇・八・一)、「水戸地裁龍ヶ崎支部平一〇(ワ)一五五号、発売禁止等請求事件、平11・5・17判決、請求棄却・確定」の解説文。
 なおこの解説に言うX氏は『トンデモ本の世界』ではしばしば取り上げられている飛鳥昭雄(あすかあきお)氏で、Y氏は『飛鳥昭雄の大真実!』——妄想の惑星ヤハウエの謎』の著書のある古関智也氏である(判決文には本名で記載されている)。
- (7) 著者の主張をそのまま垂れ流しするなら訳すだけでもよいが、検証しながらということになると一つ一つ原典に当たって裏を取らなければならないので、大変な手間なのである。
- (8) この中州古籍出版社の編集者による序文にも少し興味を引く部分がある。
 丁振宗氏の伝統的思考様式を超越した研究方法や考え方について、その意義はどのような結論を出したかにあるのではなく、むしろ人々に全く新しい『山海経』研究の理念を示し、今後の学術研究に対して方法論上の手本を示したことにこそあるのだ、と我々は考える。もちろん本書のいくつかの観点は我々の考え方を代表していない。本書のいくつかの結論はまだまだ検討や議論が必要であろう。読者のご判断にまかせたい。
 いかげだろ? 中国大陸側の出版社編集部が、こんな本を出しちゃっていいんだろ? とまどっている様子が感じ取れないだろうか? 欧米や日本で間違っってベストセラーになってしまったトンデモ本が中国で翻訳・出版される際にも、このような断り書きを編集者の前書きや後書きに見ることがしばしばある。外国でベストセラーになっているんだから価値があるはずだが内容を読むと荒唐無稽、それに対してまだまだトンデモ本に免疫のない中国大陸の出版社がとまどって、一応保険のために断り書きをしている、そんな様子を讀み取るのはうがちすぎだろうか?

(9) 以下原書の図の番号は再刊分の番号による。

(10) 本書を最初に日本に紹介されたのは北海道大学の武田雅哉氏である。『週刊朝日百科 世界の文学一〇一 中国 詩経・楚辞・山海経ほか』「いまも息づく怪物幻想」の『山海経』の謎を現代科学で解く」において武田氏は次のように解説しておられる。

『山海経』の記述に見える物体が、すべて超古代文明において作られた科学兵器であったことを証明しようとする現代の書物『古代中国のXファイル—現代科学技術の知識で山海経の謎を解く』（丁振宗著、台北・知書房刊、一九九七年）。「太陽を追った『夸父』は、古代の三角翼ジェット機であった！『夸』の字は機体の形状を表し、『父』の字は、噴射された火炎を表しているのである……」と解説する。『山海経』の世界は、現在このような形でも実に元気に読まれている。

(11) 図はすべて馬昌儀『全像山海経図比較』（学苑出版社 線装一帙全七冊 二〇〇三）によった。なお同じ著者による『古本山海経図説』（山東画報出版社 二〇〇一）も参照されたい。

(12) 平凡社古典文学大系の『山海経』（中国古典文学大系第八卷『抱朴子／列仙伝／神仙伝／山海経』。後に『山海経』のみ平凡社ライブラリーとして新書化）で高馬三良氏は、この「方（まさに『いましがた』したばかりだ）」を

いまし魚を捕う
と訳しておられる。

(13) 第十七章「巴人」「巨人」とその他の「人」

(14) 前掲馬昌儀氏の『古本山海経図説』によった。

(15) ちなみに『蒋本』は明の万曆二五年（一五九七）刊で、清の康熙六年（一六六七）刊の『広注』より古い。

(16) 例えば第十四章「鳥」の検討で丁氏は次のように述べる。

（鳥が）「人面」というのは操縦席のパイロットによって操縦されていることを示す。キャノピーを通してパイロットの顔が見えるからである。
ここもどうもそういう理屈らしい。

(17) 図1の3に挙げた「鵝」はそうした翼が人の手の形になっている飛行機である。

(18) 中州古籍出版社再刊本は誤って「飲頭国」に作る。

(19) 海面効果翼船、地面効果翼機なども。水面・地面近くを飛行する時に翼面の受ける高い揚力を利用した、船と飛行機の間乗りの物。Wing-in-Surface-Effect (WISE) / Wing-in-Ground-Effect (WIG) / エクストラプラン。

(20) 注(12) 参照。

(21) 武田氏は前掲書で

……陶淵明には、『山海経を読む』という詩がある。そこには『周王伝』をサラリと読んで、『山海図』をバラバラとながめっていると、あっという間に宇宙を見つめたようだ。これが楽しくなくて何が楽しい！という文句がある。「周王伝」とは、『穆天子伝』のことだ。

彼のことばを信するならば、三世紀当時、「山海図」なるものが存在したらしい。おそらく『山海経』をもとにして描かれた、怪物図鑑のようなものであろう。隋・唐時代（五八九〜九〇七年）の書籍リストも、郭璞に『山海経図贊』という著書があったことを伝えている。

と述べておられる。

(22) 王紅旗・文、孫曉琴・画『經典圖說 山海經』上海辭書出版社、二〇〇三年八月

(23) 為、丁氏は誤って惟に作る。

（以下は非常に淡く印刷された漢文の本文と思われる。内容は『山海經』の図説に関する記述と、丁氏が誤って「惟」に作るという指摘に関する議論と思われる。文字が小さく、読み取りが困難である。）